

親鸞筆『阿彌陀經』『観無量壽經』の漢字音について

A Study on the 13th-Century Kanji Pronunciation in Shinran's *Amida-kyo* and *Kanmuryojū-kyo*

佐々木 勇

Isamu SASAKI

The purpose of this study is to describe *go-on* (呉音), a Japanese variant of a system of Chinese pronunciation, used in early 13th-century Japan. The original texts used in this study are the *Amida-kyo* and the *Kanmuryojū-kyo*. These texts were transcribed around 1200 by Shinran (1173-1262), who is regarded as one of the greatest men of religion in Japan. The *kana* and accent marks added beside the *kanji* in the texts indicate the *kanji* pronunciation used at the beginning of the 13th century. These *kana* and accent marks show that most of the *kanji* used in the texts was pronounced in *go-on*.

Based on the *kanji* index to the *Busssetsu Amida-kyo* and the *Kanmuryojū-kyo* (already published in three parts in the *Bulletin of Hiyeyama Women's Junior College* 27(1992)-29(1993)), the present writer has made a detailed description of the *kanji* pronunciation in these two Buddhist scriptures.

一 はじめに

『阿彌陀經』『観無量壽經』は、奈良時代以来、浄土宗諸宗で重視されて

きた。「正倉院文書」にも、しばしばその名が見られる。

読誦の際は、音読・訓読の両様があったようである。その両様の読みを示した訓点資料が残っている。しかし、漢字の音で通して読まれている資料は、鎌倉時代以降のものしか管見に入っていない。本稿でとりあげる親

鸞筆の「阿彌陀經」「觀無量壽經」は、その最古のものである。⁽¹⁾

親鸞筆「阿彌陀經」「觀無量壽經」は、親鸞(一一七三—一二六二)によつて、一二〇一—一二〇五年ころに書写されたものとされている。⁽²⁾

この經の本文の多くの漢字には、漢字のアクセント(声調)を示す声点と、片仮名とが、これも親鸞によつて加點されている。その漢字音注は、鎌倉時代初期の日本吳音を知るための貴重な資料となる。

仮名音注は、ごくわずかではあるが、当時の經文読誦の音を知ることができる点で重要である。

また、本資料の声点は、吳音声調を示しており、四声体系で加點されている。清濁を区別し、入声については、「急」(舌内入声と入声の促音)と「緩」(喉内入声・唇内入声)とを区別する親鸞独自のものである。⁽³⁾この声点によつて、当時の漢字音の声調・清濁・連濁の実態・入声の発音の方法・入声の促音化の実態など多くのことを知ることができる。

このような貴重な鎌倉時代の日本漢字音資料でありながら、本資料は、漢字音資料としては、従来ほとんど活用されていなかった。そこで、利用の便をはかるため、私はかつて、漢字音注が存する漢字の漢字索引を作成し、研究資料として公表した。⁽⁴⁾本稿は、その研究篇にあたる。

二、漢字音の訓点の種類

本資料の漢字音注は、仮名音注と声点とである。反切注・類音字注は、無い。以下、それぞれについて述べる。

三、仮名音注

仮名音注は、少ない。左に掲げるものが、その総てである。

(出現順に挙げた。()内は、所在。詳しくは、先掲の漢字索引参照。)

(水) 求(去濁)水シキ反(上) (三三)

(漱) 水シキ反(上)漱ソク反・シユ反(平)口(平) (三三)

(汚) 汚オ反(平)(去) (五四)

(蹄) 蹄テイ反(去)泣(入疑) (七六)

(冰) 當(去)起(平)冰ヒヨウ反(平)想 (二四七)

(方) 一(入疑)一方ホウ(去)面(平) (二五二) 八(入急)方ホウ反(去) (二五二)

(鼓) 鼓コ反(平) (二六二)

(粗) 名為粗シヨ反(去)見 (二六六)

(畫) 百種(平)畫エ反(平) (一九五)

(己) 自見己ヨ反(平)身(去) (五一八)

(壯) 壯シヤウ反サウ反(上)士(平)西 (五四四)

(遑) 不遑クワウ反(上) (五九六)

(鶴) 白(入濁急)鶴カク反(入疑)孔(平)雀(入濁疑) (五一)

(俎) 難(平)俎シヨ反(上)佛 (一一六)

(宿) 宿シウ反・シユ反(平)王(去)佛 (一三一)

複数の読みがある字(「宿」「壯」「方ホウ・ハウ」など)、または紛らわしい字(「己」と「已」、「汚」と「汗」など)、難字(「冰」「蹄」など)に加點したものであろう。

親鸞は、仮名音注に「(片仮名)反」の形式を用いている。本資料もその一つである。⁽⁵⁾

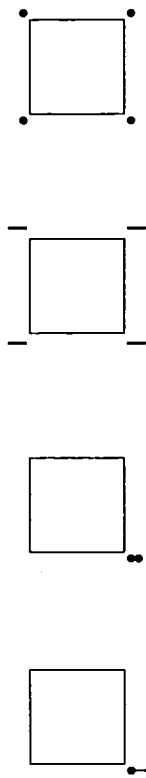
四、声点

1 声点の形式

本資料の声点の形式は、a・b一c・dの四種類である。声点加点点の若干を、つぎに挙げる。

- a・ 菩薩 (二三) 忘失 (六二五)
- b一 行列 (二八六) 自絶 (七六)
- c・ 八尺 (四三五) 具足 (一五二)
- d一 本国 (四六七) 千劫 (五五五)

声点の形式を加点点位置を区別して整理すると、次の通りである。

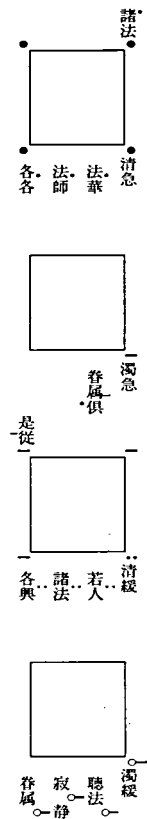


漢字の四隅への加点点は、左下隅から右回りに平声・上声・去声・入声に対応する。これは日本呉音資料の中心的な声調体系である四声体系である。このうち、●と一とは入声にしか見られない。

右は、非常に希な形式であるが、本資料所載の左の点図と一致するものである(西本願寺本「唯信抄」・専修寺本「浄土高僧和讃」にも同様な点図が親鸞によって記されている)。

親鸞筆「阿彌陀經」「觀無量壽經」の漢字音について

親鸞は、多くの写本に声点を加点点しているが、そのなかに、右のような独自のものが存するのである。⁽⁶⁾



2 「廣韻」声調との対応関係

本資料の声点から知られる声調を、「廣韻」の声調と比較してみる。鎌倉時代初期の呉音資料の声調の概要を見るためであり、また、従来の研究と比較するためである。

呉音声調は、直前の字の声調の影響によって変化するため、句頭の字に限って調査した。梵語音写字は除外した。また、「廣韻」入声字には、原則として入声点が加点点されるため省略した。⁽⁷⁾ 整理の結果は、表1のようになる。

表1 本資料

平			廣韻
平	去	上	平
五五	二五二	二	一八
例数			

計	去			上	
	去	上	平	去	上
四三二一	二二二	一	七〇	八	四

右の表1から知られる主な点は、次の二点であろう。

①『廣韻』の平声字を去声とし、『廣韻』の上声・去声字を平声とした例が多い。

②本資料には、全体的に上声の例が少ない。

①は、日本呉音の声調と『廣韻』声調の対応関係の一般的なものである。これによって、本資料の声点が、呉音の声調を示していることが確認される。『廣韻』と同一の声調を示す声点の加点例数は、全体の十パーセントほどである。

この割合は、保延二年(一一三六)写『法華經單字』を境に、十〜二十パーセントになることが指摘されている。それ以前は、四十〜五十パーセントの一致率を示していたものが、これを境に「整備された」というものである。本資料はそれ以後の加点であって、「整備された」呉音声調を反映している。

これは、親鸞の他資料でも同様の状況である。左に、『三帖和讃』についての調査を高松政雄の論文から引用する。⁹⁾ 語頭の字に限った調査である。

表2 『三帖和讃』

計	去			上			平			廣韻
	去	上	平	去	上	平	去	上	平	本書例数
二六六	三	一〇	七七	四	三	五七	四七	四九	一六	
		*					**	*		

〈註〉* 一音節のもの
** 二音節のもの

②本資料には、全体的に上声の例が少ない」は、日本呉音の声調に、本来、上声が存在しなかったといわれる根拠とされる事象である。¹⁰⁾ 本資料のように、比較的古い呉音資料には、上声の加点例が極めて少ない。

右の調査の範囲で、本資料の上声加点の具体例は、次の通りである。

a 『廣韻』平声↓上声

〔渠〕渠(上)(去下(平)通) (二〇六)

〔如〕如(上) (三九五)

b 『廣韻』上声↓上声

〔不〕不(上)可(平) (四四) 不(上)宜(下)通 (五五)

〔婉〕婉(上)轉(上)通 (一九六)

〔水〕水(上)鳥(上) (四二一)

c 『廣韻』去声↓上声

(二) 二(上)十五(上)由(上)句 (一九四)

呉音形が一音節の字が多いことが注目される。この点について、次項で述べる。

3 一音節去声字の上声化の割合

日本呉音で本来去声であった字が上声になることを、上声化と呼ぶことにする。日本呉音の去声字の内、一音節のものは、上接字の声調の影響によらなくとも上声化する。この現象は、鎌倉時代に入って顕著になり、鎌倉時代中期には、ほぼ完了するものである。¹¹⁾

本資料の一音節去声字は、大部分が去声のままであり、上声化していない。句頭の例に限った調査では、去声—一〇九例、上声—五例である。これは、鎌倉極初期の字音直読資料の実態を示すものである。¹²⁾

ところが、先引の親鸞『三帖和讃』についての調査(表2)では、一音節字の上声化の割合が増加している。『三帖和讃』は、寶治二年(一二四八)に「浄土和讃」「浄土高僧和讃」、正嘉二年(一二五八)に「正像末法和讃」の原本がつけられ、合わされたものである。¹³⁾ 本稿の対象資料である『阿彌陀經』『親無量壽經』とは、四、五十年の開きがある。この間に、親鸞個人の中で漢字のアクセントが変わったのであろうか。この四、五十年間は、一音節去声字の上声化が著しく進んだ時期であり、同一人の漢語アクセントが変化することも全く考えられないことではない。そこで、親鸞加点資料の内、比較的多くの声点加点が見られる資料の上声化の様子をくらべてみる。比較したのは、次の資料である。

親鸞筆『阿彌陀經』『親無量壽經』の漢字音について

- A 『阿彌陀經』『親無量壽經』 (二〇一—二〇五年頃) △本資料▽
 - B 草稿本『教行信証』 (二二三年—)
 - C 『三帖和讃』 (二二四八年・二二五五年)
 - D 専修寺本『唯信鈔』 (二二五七年か)
- 比較の結果の若干例を、次に表覧する。

	A本資料	B『教行信証』	C『三帖和讃』	D『唯信鈔』
奇(去)	奇(上瑞(平濁))	奇(上)△2▽		
愚(去濁)	愚(去濁)癡(上)	愚(上濁)癡(上)		
	愚(上濁)癡(上)			
	△2▽			
	愚(上濁)鈍(平)			
	愚(上濁)惡			
猶(去)		猶(上)靈(上)		
虚(去)	虚(去)偽(上濁)	虚(去)空(上)△2▽		
	△2▽			
	虚(上)仮(平)			
	虚(上)妄(平)△2▽			
	虚(上)誑(平)	虚(上)誑(平)		
	虚(上)无(上)	虚(上)无(上)		
衣(去)	衣(上)			
	衣(上)服(入濁緩)			
龜(去)	龜(上)△2▽			
	龜(上)想(平)			
	龜(上)續(平)			
				龜(上)妙(平)

(△)▽内は、複数の場合の例数。

右に一部を示したとおり、A本資料とB以下の他資料とでは、あきらかに相違が見られる。ただし、本資料とB以下の他資料とには、加點時期の相違以外に、文献の性格の相違が存する。すなわち、本資料は經文の字音直読資料であるが、B以下の資料は和化漢文あるいは和漢混淆文の漢語に音を注記したものである。經文の直読音と和化漢文・和漢混淆文の漢語の音に相違が存したのもかもしれないが、右の相違が親鸞の漢語アクセントの変化を示すとは言い切れない点が残る。和化漢文・和漢混淆文への親鸞の若い時期の加點資料、あるいは親鸞晩年の字音直読資料の出現が待たれるところである。

よって、この相違が何によるものかは断定できない。しかし、個人の中でのアクセントの変化を示すものと考える余地はある。現代において、アクセントの平板化傾向が指摘されているが、これは、同一人にも変化が見られる現象である。鎌倉時代に、時を隔てたアクセント加點資料を残す人物を親鸞以外に求め、追及したい問題である。今後の課題としたい。

4 清濁

本資料の声点は、いわゆる清濁を区別している。この声点によって、当時の呉音の清濁の実態を見ることができるといえる。

従来の研究にしたがい、『韻鏡』を尺度とすることにす。『韻鏡』の清濁と本資料の清濁を比較してみる。連濁による濁音を除外するために、句頭の用例に限った。

次濁		濁		次清		清		韻鏡
濁	清	濁	清	濁	清	濁	清	本書
八	一〇四	一一二	一八	一	四〇	九	二五二	例数

八例全例疑母の漢字。

右のようであり、原則として、『韻鏡』の清・次清・次濁（疑母を除く）は本資料で清に、濁と次濁疑母は濁に対応している。これは、中国中古音の清濁と日本呉音の清濁の対応関係の原則に一致するものである。

鎌倉初期という時代のいわゆる清濁の表記は、恣意的のように見えるのが一般的である。特に濁の表示は必ずなされるといえるものではない。すなわち、同一字に、ある箇所では濁の表示をしながら別の箇所ではしないということが多いのである。

ところが、親鸞の清濁表記は、右に整理したように、精度がきわめて高い。

よって、中国中古音の清濁と日本呉音の清濁の対応関係の原則から外れる例も、誤点ではなく、日本呉音の実態を反映したものであると解釈できる。具体的には、次の例である。

①『韻鏡』「清」↓本資料「一濁」↗九例↘

〔告〕告平濁(五6)

〔縦〕縦去濁廣平(一九4)

〔深〕深去濁信平(四七2)

〔先〕先去濁(二八3・三七7・四二6)

〔分〕分平濁齊上濁分去明(二五5) 分平濁(二〇5)

〔并〕并去濁(②1)

② 『韻鏡』「次清」↓本資料「一濁」△一例▽

〔充〕充去濁滿平(③4)

③ 『韻鏡』「濁」↓本資料「・清」△一八例▽

〔渠〕渠上(去下平濁)(二〇6)

〔疾〕疾入急至平(二5)

〔愁〕愁去憂上(六3)

〔尚〕尚去無上(⑤6)

〔臣〕臣平(五2・五4)

〔池〕池去底上(③4) 池去中上(③6)

〔被〕被平(六2)

〔鳧〕鳧平雁平濁(二〇1)

〔盜〕盜去(五七4)

〔蹄〕蹄テイ反(去泣入疑)(七6)

〔華〕華去上(一九3・五八4)

ただし、左の匣母の字は、呉音で頭音ワ行となり、問題ではない。

〔或〕或入疑有國土(九2)

〔黃〕黃去金上濁(④2) 黃去色(③7)

〔和〕和去鳴平(二一5)

この現象については、岡本勲の検討がある¹⁶⁾。その検討資料となっているのは、古辞書・音義である。本資料の分析によって、生の読誦音を反映する資料の具体例を知ることができる。

5 入声点の機能

本資料にみられる特殊な声点形式は、本資料以外の親鸞遺文のなかでは、前引の『教行信証』にのみ見られる¹⁷⁾。この声点の形式は、現存資料のなかでは、親鸞の比較的若い時期の加點資料に見られるのである。

『教行信証』に見られる入声点は、いまだ開音節化していなかった舌内入声と入声の促音を「急¹⁸⁾」で、すでに開音節化していた喉内入声・唇内入声を「緩¹⁸⁾」であらわしたものであることが指摘されている。

ここで、本資料の入声点の機能を調査してみる。

『教行信証』との比較の便のため、入声点の種類と下接字の頭音の別とによって整理する。ただし、本資料の声点は、『教行信証』とは異なり、字音直読のためのものである。そのため、入声点加點字が、句末かそれ以外かによって分類した。その判定は親鸞加點の句切り点による。なお、以下、
・を清急・一を濁急・●を清緩・●を濁緩とする親鸞の用語を用いる。

a 「急」の声点

ア句末の例()内は延べ数

舌内入声―清急17(22) 濁急7(8) 計24(30)

唇内入声―清急0 濁急0 0

喉内入声―清急1(2) 濁急0 1(2)

イ句末以外の例(延べ数である。空欄は用例無し。以下同じ。)

喉内		唇内		舌内		声点	
						濁急	清急
5	49	5	2	6	3	カ	行
	2	11	6	3	14	サ	行
				2	2	タ	
	2	1	1	1	5	ハ	
				2	3	ガ	
				2	2	ザ	
				1	3	ダ	
				1	2	バ	
					5	ア	
					2	ナ	
				2	2	マ	
				1		ヤ	
					2	ラ	
					2	ワ	

b 「緩」の声点

ア句末の例(一)内は延べ数)

舌内入声—清緩 0 濁緩 0 計 0

唇内入声—清緩 4 (10) 濁緩 4 (8) 8 (18)

舌内入声—清緩 11 (15) 濁緩 9 (28) 20 (43)

イ句末以外の例

喉内		唇内		舌内		声点	
						濁急	清急
5	6	2	4		4	カ	行
4	19	3				サ	行
	6					タ	
1	4	1	1		1	ハ	
2	9					ガ	
2	6	3				ザ	
	5		2			ダ	
	6					バ	
2	4	1	2		2	ア	
	3	4	1		3	ナ	
2	2		1		1	マ	
						ヤ	
7	3	1	1			ラ	
2	1		2			ワ	

右のごとくであつて、『教行信証』と同様に、「急」の声点は、舌内入声または促音化の可能性が考えられる入声字(無声音が続く場合)に加点され、「緩」の声点は、下接字の頭音にかかわりなく、唇内・喉内入声字に対して加点されている。

例外となるのは、第一に、喉内入声で句末であるにもかかわらず「急」の声点が加点された次の一字二例である。

〔逼〕所逼(入急) (一三五) 苦逼(入急) (五九六)

この「逼」は、『法華経单字』で「ヒツ」、『観智院本類聚名義抄』の「和音」でも「ヒチ」と仮名書きされている。『凶書寮本文鏡秘府論』『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝』にも「ヒツ」の加点が見られ、当時、日本漢字音では、舌内入声字として扱われていたようである。本資料の例も、それを反映したものである。親鸞『教行信証』にも、「逼(入)悩(三15)」の例がある。

例外の第二は、舌内入声でありながら「緩」の声点が加点された左の四字十一例である。(△)内は複数の場合の例数を示す。

〔一〕一(入緩)卷(平) 一(入緩)一△2△ 一(入緩)寶像 第十一(入緩)観

一(入緩)日

〔七〕第七(入緩)観 経七(入急)七(入緩)日

〔八〕第八(入緩)観(平)

〔日〕日(入緩)日 日(入緩)没(入急)

右のうち、「一・日」は、『教行信証』においても「緩」の声点加点例が、次のように見られる。

〔一〕一(入緩)時(上) 一(入緩)異(平) 一(入緩)之言(上) 第一(入緩)

一(入緩)日(入緩) 一(入緩)百(入緩)五(上)十(入緩)年

〔日〕日入聲 一（入聲日入聲）今（去日入聲）

また、親鸞の加点を移点したと考えられる龍谷大学蔵「無量壽經」でも「七・日」に左の「緩」の加点例が存する。⁽⁹⁾

〔七〕七入聲歩（平過）

〔日〕日入聲世

右のような語の中では、当時すでに、これらの漢字が開音節化して発音されることがあったものと思われる。多くの舌内入声の漢字の韻尾が「仏フツ」「物モツ」「出シユツ」など、「一ツ」表記されるようになって今日に至る流れの中で、右の「一・七・八・日」は、今日でも「一チ」と書かれ読まれるものである。よって、他の舌内入声の漢字よりも早い時期に、「一チ」の音で発音される場合があったことが予想されていた。しかし、その証明は困難であった。それが、この特殊な声点によって証明されたのである。

五、むすび

古代語から近代語に変化する過渡期にあたる院政・鎌倉時代の日本語の実態を知ることが、日本語の歴史を解明する上で重要である。

その方法の一つとして、当期の一個人の言語の全容をできる限り明らかにすることが考えられる。

本稿の筆者は、日本漢字音の歴史を究明したいと考えている。その際に、右の方法に依ろうとすれば、一個人の漢字音の全容を知ることができるような文献が必要である。しかし、その資料は、非常に限定される。漢字・漢語を書いたものは多いが、一個人がその音を大量に注記したものは少な

いからである。そのなかにあつて、漢字音注を丁寧に記した親鸞遺文は、貴重な文献群である。

親鸞の漢字音の全体像を知るためには、まず、各資料の個別的な調査が優先する。

そこで、本稿では、親鸞筆「阿彌陀經」「觀無量壽經」に加点了れた漢字音注から知られる点について述べてきた。

今後さらに、親鸞の他資料について、本稿のような調査・分析をおこないたいと考えている。

注

〔1〕 佐々木勇「龍門文庫蔵『浄土三部經』について」△「鎌倉時代語研究」第十三輯、一九九〇年一〇月V参照。

〔2〕 「親鸞聖人眞蹟集成 第七卷」△法蔵館Vの「解説」参照。

〔3〕 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」△「東洋大学大学院紀要 第2輯」V、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」△「国文学攷」第六十九号V参照。

〔4〕 「比治山女子短期大学紀要」第二七―二九号、一九九二―一九九三。

〔5〕 これについては、佐々木勇「龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について―定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点―」△「鎌倉時代語研究」第十六輯、一九九三年五月に述べた。

〔6〕 この声点の方式について沼本克明は、注〔3〕引用論文で、「この親鸞の方法はその前後の時期に他に同類のものを見出すことが出来ない所から判断して、親鸞一代限りのものであつたと考えるべきものであろう。」と述べている。

〔7〕 ただ一例、入声点とともに平声点が加点了れた次の例がある。「音_平入_平生_平（八_平）」。

〔8〕 高松政雄「呉音声点の性格」△「国語国文」一九八〇年三月。

〔9〕 「呉音声調―親鸞の場合―」△「岐阜大学教育学部研究報告 人文科学」第二六巻。

一九七八年二月)。

(10) 沼本克明「吳音の声調体系について」(『国語学』第一〇七輯、一九七六年二月)後、『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』に修正所収)。

(11) 佐々木勇「吳音一音節去声字の上声化の過程」(『鎌倉時代語研究』第十輯、一九八七年五月) 参照。

(12) 注1引用の拙稿、参照。

(13) 本文の大部分は、親鸞真跡ではないと判定されている。しかし、今問題にしてい
る声点は、親鸞の加点であろうと推定されている(『親鸞聖人真蹟集成 第三卷』八一
九七四年、法蔵館)。「解説」参照。「正像末法和讃」では、真蹟だと判定されてい
る部分にだけ声点が加点されていることから、声点は親鸞の加点であると本稿の筆
者も判断する。

(14) 沼本克明「日本漢字音の歴史」一六頁―二四頁、参照。

(15) 佐々木勇「声点「△」の機能」(『かがみ』第三十一号、一九九四年三月) 参照。

(16) 「注音本『開蒙要訓』と日本漢字音―清濁のゆれをめぐって―」(『訓点語と訓点
資料』第七八輯、一九八七年一〇月)、「日本漢字音に於ける頭子音の清濁―韻鏡清
の字にして日本字音濁となるものに就て―(上)(下)」(『国語国文』一九六八年一
二月、一九六九年一月)ともに、「日本漢字音の比較音韻史的研究」(一九九一年、
桜楓社)に所収。

(17) この他に、親鸞の加点を移点したと考えられる資料で同様な声点形式のものが、
一点報告されている(佐々木勇注5論文参照)。西本願寺本「唯信抄」・専修寺本「浄
土高僧和讃」にも同様の点図が存するものの、実際の加点はこの形式に依っていな
い。

(18) 注(3)論文、参照。

(19) この資料ではほかに「跌・裂・鐵・徹」に一例ずつ「緩」の例が存する(『蹉
跌』(入聲)、『裂』(入聲)、『鐵』(入聲)、『徹』(入聲)参照)。

(言語文化学科 日本語文化専攻)
(一九九四・一〇・二五受理)